令和３年１１月８日発行

令和３年度学校だより　甲府市立南西中学校

銀　杏（いちょう）

第　２１　号

学校教育目標「たくましい心と体をもち　学び合える生徒の育成」　文責：校長　石　井　敬

11月

毎朝、校門で子どもたちを迎えるのが日課になっていますが、私のようなメガネをかけている者にとっては厄介な季節となってきました。朝の外気の冷たさと吐く息の温かさによってメガネが曇ってしまうからです。一方で、マスクに覆われた口元だけは温かさが保たれるため、寒さしのぎにはちょうど良いのかもしれません。日に日に朝夕の寒さが増し、日暮れがどんどん早まるこの時期だからこそ感じる、マスク生活の明と暗といったところでしょうか。

さて、１０月には、コロナの感染拡大により変更や延期を余儀なくされた諸行事を予定どおり行うことができました。一つ終わればもう次の行事が控えているような状況でしたので大変だったと思いますが、子どもたちの頑張りによってどの行事も達成感の得られるものとなりました。そんな１０月の「動」に対し、１１月は「静」を意識し、子どもたちには自分自身とじっくり向き合いながら学習と生活における新たな目標づくりや軌道修正に取り組ませたいと思います。特に３年生は進路決定の大事な時を迎えますので、担任との二者懇談、さらには保護者の皆様も交えた進路相談等を通して十分な話し合いを重ね、目標とする進路に近づき、それを乗り越えるためにやるべきことを再確認するとともに大きな壁に挑む心構えをつくっていけたらと思います。

大成功のうちに閉幕！！～第５５回いちょう祭～

行事が目白押しだった１０月のトリとなったのが、第５５回いちょう祭。コロナの感染拡大に見舞われ、計画しては変更を繰り返してきましたが、子どもたちと私たち職員の“諦めない気持ち”が通じたのでしょうか、当日は秋晴れの好天に恵まれ、子どもたちの若い力と笑顔があふれる素晴らしいいちょう祭となりました。

今回は、２０３２年の未来から生徒会長の福島ハルミさんが、南西中の文化と伝統が『繋承』された第５５回いちょう祭を見学に来るというストーリーが全体を貫いており、オープニングから動画あり、生中継ありと“ハイブリッド”な構成になっていました。子どもたちの演技もさることながら、友情出演（？）していた先生方の熱演が笑いを誘いました。清水さん、河合君、佐野さんの３人による力強い『開祭宣言』が校長室からライブ中継で伝えられると、いよいよ開幕です。

まず最初に紹介されたのが、全校制作でした。１センチ四方のマス目を指定された色で塗りつぶしているときには、あんな素敵な絵に仕上がるとは誰も想像できませんでした。生徒玄関の２階から吊された全校制作を見上げては、口々に上がる「す

ごいね～」「かっこいい！」という子どもたちの声が作品の素晴らしさを物語っていました。また、

玄関横に飾られた美術部の作品には応援、ソーラン、リレーなどに取り組む生徒の姿が描かれ、テーマの『繋承』とのかかわりを強く感じさせるものでした。

続いて学級旗の紹介では、実行委員からの説明とともに各クラスの熱い想いを込めた力作が、これも生中継で披露されました。学年が上がるにつれデザイン、色使い、緻密さなどのレベルもアップし、３年生の作品は１・２年生にとって大いに参考になったことでしょう。

文化部門の目玉の一つである吹奏楽部の発表は、体育館前のスペースをステージに見立て戸外での演奏となりました。当然、客席も戸外でしたが、青空の下で気分も晴れやかだったので、「マリーゴールド」、「学園天国」の

２曲とも演奏者と聴衆とが一体になった大盛り上がりのステージとなりました。吹奏楽のあとは『繋承』すべき伝統の応援。コロナ禍であることから、今年は応援団の演舞を全校で観るというスタイルに変えて行いました。気合いと気持ちのこもった応援に誰もが魅了されました。

文化部門の締めくくりは、合唱に代わる新たな試みとして挑戦したボディパーカッション。練習が始まったばかりの頃は恥ずかしさが先に立ち、大きく表現することがなかなかできませんでした。しかし、３年生が根気強く練習をリードしくれたお陰で、ボディパの楽しさ・面白さ、そして合唱と全く同じようにみんなの気持ちを合わせることの大切さに気づき始めてからは変化が感じられるようになりました。当日は、赤ブロック、青ブロックそれぞれのパフォーマンスをお互いに見合い、楽しいひとときを過ごしました。

そんな和やかな雰囲気からは一転し、ビーボーではスピーディーで迫力のある試合が繰り広げられました。ビーボーは昨年度から取り入れられた種目ですので、ここでも２・３年生から１年生に勝つための秘訣が『繋承』され、１年生も楽しく取り組むことができたようです。そして、最も『繋承』されていることを印象づけたのが全校ソーランでした。一挙手一投足がよく揃っており、演じているときの一人一人の表情が実に楽しそうだったのが目に焼き付いています。演技が終わったとき、思わず「もう一度見たいな～」と私はつぶやいてしまいました。その後の大縄跳び、全員リレーでも持てる力を出し切ってのパフォーマンスが見られ，いちょう祭を心から楽しんでいることが感じられました。

最後は、再び各教室と体育館とをオンラインで結んでの閉祭式で第５５回いちょう祭を締めくくりました。２０３２年の生徒会長・福島ハルミさんからの手紙には、第５５回いちょう祭を楽しみつつ学んだことも多く、１０年後、２０年後の南西中でも文化と伝統と、そして想いをしっかり『繋承』した南西中ならではのいちょう祭をつくっていくことを約束すると記されていました。